

## 「聖人」は幸福か——儒教における善と幸福

渡辺浩

「聖人」は幸福か。この設定自体がおかしいかもしれない。確かに、朱子学者等からすれば、「聖人」には、「天理」と一体であること自体が、常に深い楽しみをもたらすはずであり（「聖人之心渾然天理、雖困極而樂亦無不在焉」『論語集注』述而）、貧賤・富貴等は問題でないのであろう。

しかし、問題は、それで終わらない。第一に、儒教は、現世を否定せず身体を敵視しない。しかも、「聖人」とは完全な人であるならば、人としての感覚的欲望の充足による喜びもひととき深いのではないだろうか。深遠な内面的幸福だけを論じて儒教が完結するわけでは、おそくない。第二に、「天」は善に幸いを、悪に禍いをもたらすのが原則（「天道福善禍淫」『書経』湯誥）だからこそ、信頼できるのであろう。悪人が栄え、善人が苦しむのが常であるなら、「天道」は常に「非」ということになる。人類史を眺めれば、そう認めるのが正直かもしれないが、それでは、「天道」「天命」「天理」を尊ぶ根拠はどこにあるのか。第三に、特別な人だけが内面的幸福を味わっていればそれでよいのか。大多数の（我々のような）凡人は、正しい発言をしていじめられ、善い行動をして迫害されるようなら、いっそ悪に同調してずるく生きたくなるだろう。儒学者は、この世で苦しんだ善人は死後に至福が得られるという「補償」を約束しえない。儒教にとって、この世における善と幸福の関係は、やはり問題なのである。

実際、これを巡って様々な議論があった。第一に、一見そうは見えなくとも、何らかの意味で「福善禍淫」は事実だという種々の主張がある。第二に、事実は別にして、ともかく「衆人」に「福善禍淫」を信じさせるのが「智者」の責務だという説もある。そして、第三に、「世の悪は如何ともしがたい。ただ分に安んじ、四季の移ろいを楽しめば良い」という世俗内隠遁の勧めもある。そして、第四に、善と幸福の結合を論ぜず、「人である以上、人としての誇りにかけて悪に手を染めない。それが大事だ」という考えもある。これは日本近代史においても重要である。